

ユージェニック・ヘミングウェイ

中村, 嘉雄

<https://hdl.handle.net/2324/4784716>

出版情報 : 九州大学, 2021, 博士 (文学), 論文博士
バージョン :
権利関係 :

氏名	中村 嘉雄			
論文名	ユージェニック・ヘミングウェイ			
論文調査委員	主査	九州大学	准教授	高野 泰志
	副査	九州大学	教授	鶴飼 信光
	副査	九州大学	教授	高木 信宏
	副査	九州大学	名誉教授	小谷 耕二

論文審査の結果の要旨

本論文はアーネスト・ヘミングウェイの一九二〇年代から三〇年代の作品と語りの戦略を、優生学やマシーン文化といった歴史的背景から再検討し、これまでの自伝的作家というヘミングウェイの根強い評価を見直すことを試みている。

「第一章 伝記から政治へ——ヘミングウェイ作品の政治性と優生学の問いへ向けて」では従来の伝記批評に則して、作家の文体の起源を実際の「闘牛」経験——一九二四年の「アマチュア闘牛」——に探るとともに、この「闘牛」における「血」を通した一体感がナチスの男性兵士の精神性に類似していることを明らかにしている。そしてヘミングウェイの創作自体が時代の政治的産物であり、当時の読者とアメリカ社会に及ぼす政治的影響力を再検証する必要があると主張する。

「第二章 不毛な時代——『日はまた昇る』における優生学的アイロニー」は、『日はまた昇る』のユダヤ人ロバート・コーンの「身体」を含む多くの表象が、当時の優生学的思想・政治背景に準じていることを確認するとともに、同じ思想背景の読者を巻き込み、人種差別の責任を分散させるための語りの戦略を用いていると主張する。そして氷山理論として知られるヘミングウェイの文体は、この読者との共犯関係を築く、人種差別的、政治的無意識としても機能した可能性を提示している。

「第三章 兵士と帝国の危機——アメリカの民族的滅亡から優生学的マシーン文化へ」では短編集『われらの時代に』および長編『武器よさらば』を中心に、ヘミングウェイ作品において優生学、兵士、マシーンの「身体」の三つの要素が絡みあう理由、その文化、歴史、政治的背景が検証される。『われらの時代に』の小作品の兵士は当時の「退化するアメリカ」の象徴であり、ヘミングウェイはその優生学的退化の恐怖を短編集の時代的テーマとしていること、短編「エリオット夫妻」ではそういう時代の優生学的なアイロニーが描かれていること、『武器よさらば』では兵士の優生学的理想の「身体」を「故障」させる脅威が描かれていることを論じている。

「第四章 流線型文化とマリアの『身体』——『誰がために鐘は鳴る』の優生学的『理想』のメカニック・ボディ」は、長編『誰がために鐘は鳴る』のマリアの「身体」及び橋梁爆破のイメージには三〇年代の流線型文化の影響があることを指摘する。マリアには雑誌『ヴォーグ』の流線型工業デザイナーが理想とする「身体」のイメージが投影されているのである。さらに作品の中心的モチーフの橋梁爆破も「身体」を機械として捉え、便秘解消——効率的排泄を行う工場として見る見方から説明可能であるとする。

以上のように、本論文はこれまで伝記的事実を中心に解釈されてきたヘミングウェイの作品群を

同時代の政治的コンテクストから再解釈しなおそうとしたものであり、ヘミングウェイ研究に新たな視座を提供しようとする意欲的な論文である。

したがって本調査委員会は本論文の提出者が、博士（文学）の学位授与にふさわしいことを認める。